

看護系大学教員が認識する臨地実習におけるインシデント防止対策と
インシデントレポート記載に係る判断上の課題

林 久美子・柴 裕子

Incident Prevention Measures and Decision-Making Issues Related to
Incident Reporting in Nursing Practicum

Kumiko HAYASHI and Yuko SHIBA

研究紀要 第24号 別刷（2023年3月）
中部学院大学・中部学院大学短期大学部

Reprinted from THE JOURNAL of
CHUBU GAKUIN UNIVERSITY, CHUBU GAKUIN COLLEGE
No.24 : 99–106 (March 2023)
SEKI, GIFU, JAPAN

看護系大学教員が認識する臨地実習におけるインシデント防止対策と インシデントレポート記載に係る判断上の課題

Incident Prevention Measures and Decision-Making Issues Related to Incident Reporting in Nursing Practicum

林 久美子¹⁾・柴 裕子¹⁾

Kumiko HAYASHI and Yuko SHIBA

抄録:本研究目的は、看護系大学教員が実施する臨地実習中のインシデント防止対策と看護学生にインシデントレポートを記載させる判断上の課題について明らかにすることである。中部地方の看護系大学教員6名を対象とした半構造化面接でデータを収集し質的帰納的分析を行った。インシデント防止対策として、【インシデントの意識化のための実習オリエンテーションや危険予知トレーニングの実施】【報告・連絡・相談の徹底を指導】【対象者（患者）のリスクアセスメントに関する学習指導】【看護教員と臨地実習指導者の協力による安全管理を意識した指導体制の整備】を実践していた。また、インシデントを記載させる判断上の課題は、【学科による大枠の基準はあるが曖昧】【看護教員間のインシデント判断の齟齬】【臨地実習施設側とのインシデント判断の齟齬】であった。

キーワード:看護学生、臨地実習、インシデント、リスクマネジメント

I. はじめに

看護基礎教育課程では、卒業時点において一定の看護実践能力が求められる。臨地実習において、実際の患者を対象として看護技術を実践することは、看護実践能力の向上のために重要な意味を持つものである。しかし、看護学生の技術は未熟であり、様々な場面で臨地実習指導者や看護系大学教員（以下：看護教員）の指導を要する。また、看護学生の技術の未熟さや知識や判断能力が備わっていないことによるインシデント・アクシデント報告も少なからず存在する。厚生労働省の“医療安全対策検討会議”において、インシデントとは、「日常診療の場で、誤った医療行為などが患者に実施される前に発見されたもの、あるいは、誤った医療行為などが実施されたが、結果として患者に影響を及ぼすに至らなかったもの」とされ、アクシデントとは、「医療事故」とされている¹⁰⁾。様々な医療事故報道がされる中、医療従事者のみならず看護学生の臨地実習で対象者として協力する患者・家族においても、医療安全への関心は高まっている。臨地実習において、看護学生はインシデント・アクシデントの恐れがあることで、看護技術の実践や習得の機会を得づらい状況がある。

看護学実習ガイドラインでは、大学が臨地実習における事故発生時の対応マニュアルの整備や、実習領域ごと

に初学者に発生しやすい事故や、その予防方法について実習指導者等と事前に確認し、学生の理解を促すために実習要項等に記載しておくことが望ましい¹¹⁾とされている。

看護基礎教育課程でのインシデント報告を調査した先行研究において、看護学生のインシデント報告は「転倒」に関わる人が多いと報告されている^{1) 7) 9) 13)}。しかし、看護学生のインシデント報告は、看護師のインシデント報告とは異なり、“転倒の可能性が高い中での学生単独による移動援助”の報告事例^{8) 13)}や、“臨地実習で記載した実習記録の紛失”等の看護学生に特徴的な報告事例⁹⁾が散見される。これらのインシデントは、まれなインシデント報告であり各看護系教育機関や実習指導を担当する看護教員により、看護学生のインシデント報告の基準が異なる可能性がある。また、臨地実習中のインシデントについて、看護教員は学生に対して実習前後を通して臨地実習で遭遇するリスクを予測し医療安全に関する知識を与え、学生の医療安全に対する感性が促進するように教育していく必要がある³⁾とされている。医療安全に関する科目以外にも、多くの看護系大学で臨地実習前のオリエンテーションでインシデント防止のための教育を行っている現状がある。

よって、本研究では臨地実習中の看護学生によるインシデントを防止するために看護教員がどのような対策を

1) 看護リハビリテーション学部看護学科

行っているのか明らかにする。また、看護教員はインシデントの判断で様々な課題を感じていることが明らかとなったため報告する。

Ⅱ. 目的

本研究の目的は、以下の2点である。

1. 看護教員が実施しているインシデント防止対策を明らかにする。
2. 臨地実習中に看護教員が看護学生に対してインシデントレポートを記載するように指導する際の判断上の課題を明らかにする。

Ⅲ. 方法

1. データ収集期間

2019年4月～2020年1月

2. 研究対象者

中部地方の看護系大学で臨地実習を担当する看護教員6名

3. データ収集内容と方法

基本属性として、所属する大学の設置主体、職位、実習指導を担当している看護学領域（以下：領域）、看護教員経験年数について聴取した。また、半構造化面接法でインタビューガイドに基づき「臨地実習の指導体制」、「臨地実習指導中のインシデントを把握する方法」「大学でのインシデントの規定」「臨地実習中のインシデントの捉え方」について聴取した。インタビューは、対象者の希望したプライバシーの保てる場所で各30分～45分間実施した。インタビューは対象者の同意を得てICレコーダーに録音した。

4. 分析方法

ICレコーダーの録音データより逐語録を作成した。作成した逐語録から意味内容ごとにコード化した。コードの相違性と類似性に着目しサブカテゴリを生成した。さらにサブカテゴリから抽象度を高めカテゴリを生成した。分析は、質的帰納的分析の経験者2名で繰り返し検

討を行い真実性・妥当性を担保した。

5. 倫理的配慮

対象者に文書と口頭で、研究目的・データ収集方法、研究協力は任意であること、個人情報保護、情報の保管や破棄方法、研究成果の公表、半構造化面接時にICレコーダーを使用して録音することなどについて説明し、同意書の署名によって同意を確認した。

本研究は中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究倫理委員会の審査・承認を得てから実施した（承認番号E18-0020）。

Ⅳ. 結果

1. 対象者の概要

対象者の概要を表1に示す。対象者の平均年齢は49.3±7.6歳、看護教員経験年数は平均14.2±9.3年、臨地実習担当領域は基礎1名、成人2名、小児1名、精神1名、在宅1名であった。職位は教授1名、准教授1名、講師2名、助教2名であった。面接時間は16分～44分であり、平均29分であった。

2. 半構造化面接調査の結果

インタビューで得られたデータから693のコードが得られた。コード化の過程で、各看護学領域のことを「分野」と表現している看護教員も存在したが、すべての用語を「領域」に統一した。コードを“ ”、サブカテゴリを〈 〉、カテゴリを【 】で示す。

1) 看護教員が実践するインシデント防止対策

看護教員が実践するインシデント防止対策に関して118コードあり、12サブカテゴリから4カテゴリを抽出した。結果を表2に示す。

臨地実習前に看護教員は、“例年こういうふうなことが起こっているからこれはだめだねっていう話をし、くどいぐらいに事前のオリエンテーションの時にインシデントの話はする”など〈実習前オリエンテーションで想定されるインシデントを周知〉や“KYTを使って場面設定をしてグループでどうすることが危険なのかっていうところをグループワークして発表をして、みんな情報共有して意識付けっていうところはしてい

表1 対象者の概要

	A	B	C	D	E	F
大学設置主体	国立	私立	私立	私立	国立	私立
看護学実習担当領域	成人看護	在宅看護	成人看護	小児看護	精神看護	基礎看護
職位	教授	准教授	講師	講師	助教	助教
看護教員経験年数	21年	30年	10年	9年	6年	9年
面接時間	28分	25分	23分	38分	44分	15分

表2 臨地実習において看護教員が実践するインシデント防止対策

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数	代表的なコード
インシデントの意識化のための実習前オリエンテーションや危険予知トレーニングの実施	実習前オリエンテーションで想定されるインシデントを周知	24	例年こういうふうなことが起っているからこれはだめだよっていう話を、ぐらに事前のオリエンテーションの時にインシデントの話はする
	危険予知トレーニングによるインシデントの意識付け	7	KYTを使って場面設定をしてグループでこういうことが危険なのかっていうところをグループワークして発表をして、みんなで情報共有して意識付けているところ
	看護計画の実施前に指導者に必ず相談・報告するように指導	10	どんなささいなことも、指導者の人とかに確認してからじゃないと、行動はしないでねって指導する
	報告・連絡・相談の徹底を指導	3	(患者に)自分が受け入れてもらっているのか、受け入れがあまりうまくいってないのかっていうのは、早めに報告してねっていうのは言っている
対象者(患者)のリスクアセスメントに関する学習指導	小児の発達の特徴によるリスクアセスメントを指導	8	受け持つ年齢の子どもによっては、口の中に入る大きさの誤飲チェッカーの大きさで確認する
	術後の生体反応によるリスクアセスメントを指導	3	術後初回離床であるとかそういうときは、絶対に学生だけでしない、というふうにお願いはしている
	精神科病棟特有の注意点や持ち込み物品の制約を指導	4	精神の場合は経歴がめっちゃ長いや長い、高校出た所とか、離婚したとか、子どもが何人いてとか、そういう家族背景がすごく大事なので、個人情報めっちゃ書かれてるから、その辺がちょっと情報漏えいしたときに個人が特定されやすい
	教員が臨地に常駐する指導体制の整備	26	母性とか、小児とか、成人とかだと1病棟ないし2病棟に1名の教員が張り付け体制を取っている
看護教員と臨地実習指導者の協力による安全管理を意識した指導体制の整備	指導者と協力し、教員は臨地に巡回する指導体制の整備	10	教員がちよとずついなくなかなきゃいけないっていうのがあるから、今後はそこを指導者さんとお願ひして、指導者さんに託していく
	小人数の学生を1名の教員が担当する指導体制の整備	7	大体学生としては4、5名に、多くても6名ぐらい、少なければ4名ぐらいで1教員が張りついている
	近接する実習施設に常時駆けつけられることができる指導体制の整備	3	病院と大学が同じ構内なので、連絡があれば5分程度でちゃんと現場に行けるようになってる
	学生単独で看護援助を行わない指導体制の整備	13	うちの大学だと1人ついて、指導者さんもついてるわけなので、同時にケアがあったとしても学生だけでやるってことはない

る”など〈危険予知トレーニングによるインシデントの意識付け〉を行い、【インシデントの意識化のための実習オリエンテーションや危険予知トレーニングの実施】をしていた。

また、臨地実習前から実習中を通して、“どんなささいなことも、指導者の人とかに確認してからじゃないと、行動はしないでねって指導する”など〈看護計画の実施前に指導者に必ず相談・報告するように指導〉し、“(患者に)自分が受け入れてもらっているのか、受け入れがあまりうまくいってないのかっていうのは、早めに報告してねっていうのは言っている”など〈患者の状態について報告するように指導〉し【報告・連絡・相談の徹底を指導】していた。

さらに、臨地実習中には、“受け持つ年齢の子どもによっては、口の中に入る大きさの誤飲チェッカーの大きさを確認する”など〈小児の発達の特徴によるリスクアセスメントを指導〉や、“術後初回離床であるとかそういうときは、絶対に学生だけでしない、というふうにお願いはしている”など〈術後の生体反応によるリスクアセスメントを指導〉、“精神の場合は経歴がめちゃくちゃ長いし、高校出た所とか、離婚したとか、子どもが何人いてとか、そういう家族背景がすごく大事なので、個人情報めっちゃ書かれているから、その辺がちょっと情報漏えいしたときに個人が特定されやすい”など〈精神科病棟特有の注意点や持ち込み物品の制約を指導〉で、【対象者(患者)のリスクアセスメントに関する学習指導】を行っていた。

実習指導体制では、“母性とか、小児とか、成人とかだと1病棟ないし2病棟に1名の教員が張り付く体制を取っている”など〈教員が臨地に常駐する指導体制の整備〉や、“教員がちょっとずついなくならなきゃいけないっていうのがあるから、今後はそこを指導者さんとうとうお願いして、指導者さんに託していく”など〈指導者と協力し、教員は臨地に巡回する指導体制の整備〉、“大体学生としては4、5名に、多くても6名ぐらい、少なければ4名ぐらいで1教員が張りついている”など〈小人数の学生を1名の教員が担当する指導体制の整備〉を行ったり、大学と近接する実習施設の場合には、“病院と大学が同じ構内なので、連絡があれば5分程度でちゃんと現場に行けるようになっている”など〈近接する実習施設に常時駆けつけることができる指導体制の整備〉を行っていた。また、“うちの大学だと1人ついていて、指導者さんもついてるわけなので、同時にケアがあったとしても学生だけでやるってことはない”など、臨地実習指導者と協働して〈学生単独で看護援助を行わない指導体制の整備〉を構築し、【看護教員と臨地実習指導者の協力による安全管理を意識した指導体制の整備】を行っていた。

2) 臨地実習において看護教員が看護学生にインシデントレポートを記載させる時の判断上の課題

臨地実習において看護教員が看護学生にインシデントレポートを記載させる時の判断上の課題に関して112コードあり、13サブカテゴリから3カテゴリを抽出した。結果を表3に示す。

看護教員は、臨地実習中のインシデントレポートを記載させる判断について、“大体、委員会のほうでこころまでインシデントにしようとか、決めている”など、〈学科における大まかな基準の整備〉がある一方で、“インシデントレポートをどのタイミングで書くかっていうのはすごく曖昧”など、〈学科で詳細な基準はなく曖昧〉と感じている。また、曖昧であるが故に、“本来、メモを落としても個人情報はないけれども、メモについては、落としたということがあったことは、インシデント報告はしている”など、〈個人情報の漏洩に関わることはインシデントと判断〉や、“インシデントの中でも、二つに部類が分けられていて、本当に全然影響がない場合と患者さんに迷惑を掛けたというのとそういうふうには分かれてはいる”など、〈患者に迷惑をかけた場合はインシデントと判断〉、“インシデントレポートを取りあえず書かせるけれども、学科まで上げなくて、分野のところで止めてしまうっていうところも、それは患者さんの状況による”など、〈患者に影響がない場合はインシデントの判断が困難〉などの過去の事例に基づく判断を行っているが、“インシデント発生の報告が、学科として報告しておかなければならないものなのか、領域内で共通認識しておけばいいものなのかというところを領域長が判断する”など、〈最終的には領域長が判断〉しており、【学科による大枠の基準はあるが曖昧】であるという課題があった。

また、“准教授レベルも罰で書かせればいって言うてた人もいて、そういうふうに捉えてるんだなって思う”など、〈罰として記載させる看護教員への違和感〉や、“患者さんの下着を間違えて捨てたかなんかして、それを患者さんにこそっと新しく買わせて、インシデントを隠してた”など、〈隠ぺいしようとした看護教員への反発〉、“インシデントの判断に関して、そんな大事にしないで”など、〈リスク感性の低い教員への存在〉を感じており、“インシデントの判断は、教員間で齟齬があってもかなり違いはある”など、〈看護教員ごとに異なるインシデント判断〉を課題と捉えていた。また、“本来、学生と患者さんでいいよねと判断されたような事案に関してのときに、何かあった場合は、多分、その状態で良しとしたスタッフの責任かなと思う”など、〈看護学生にはインシデントは存在しないという見解〉も存在した。これらから、【看護教員間のインシデント判断の齟齬】が課題として捉えていた。

表3 臨地実習において看護教員が看護学生にインシデントレポートを記載させる時の判断上の課題

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数	代表的なコード
学科による大枠の基準はあるが曖昧	学科における大まかな基準の整備	28	大体、委員会のほうでこら辺まではインシデントにしようとか、決めている
	学科で詳細な基準はなく曖昧	8	インシデントレポートをどのタイミングで書くかっていうのはすごく曖昧
	個人情報情報の漏洩に関わることはインシデントと判断	4	本来、メモを落としても個人情報はないけれども、メモについては、落としたということがあったことは、インシデント報告はしている
	患者に迷惑をかけた場合はインシデントと判断	3	インシデントの中でも、二つに部類が分けられていて、本当に全然影響がない場合と患者さんに迷惑を掛けたというのとそういうふうには分かれてはいる
	患者に影響がない場合はインシデントの判断が困難	3	インシデントレポートを取りあえず書かせなければならないけれども、学科まで上げなくて、分野のところで止めてしまうところも、それは患者さんの状況による
	最終的には領域長が判断	9	インシデント発生の報告が、学科として報告しておかなければならないものなのか、領域内で共通認識しておけばいいものなのかというところを領域長が判断する
	罰として記載させる看護教員への違和感	6	准教授レベルも罰で書かせればいいって言ってた人もいて、そういうふうに捉えてるんだなと思う
	隠ぺいしようとした看護教員への反発	6	患者さんの下着を間違えて捨てたかなんかして、それを患者さんにこそっと新しく買わせて、インシデントを隠してた
	リスク感性の低い教員への存在	6	インシデントの判断に関して、そんな大事になくともっていうことを言われる教員もいる
	看護教員ごとに異なるインシデント判断	7	インシデントの判断は、教員間で齟齬があってもいいし、かなり違いはある
臨地実習施設側のインシデント判断の齟齬	看護学生にはインシデントは存在しないという見解	7	本来、学生と患者さんでいいよねと判断されたような事案に関してのときに、何かあった場合は、多分、その状態で良しとしたスタッフの責任かなと思う
	臨地実習施設側と看護教員の情報漏洩の基準の相違	6	詰め所(ナースステーション)の中でパソコンを見ていてログアウトするのを忘れてしまい、それを、詰め所の中ということもあったので師長さん的にはインシデントまでには至らないんじゃないですかっていうようなことを言われた
	看護師と看護学生のインシデントの判断の相違	19	病院で看護師になってからのインシデントと学生でのインシデントというところはすごく違いがある

また、「詰め所（ナースステーション）の中でパソコンを見ていてログアウトするのを忘れてしまい、それを、詰め所の中っていうこともあったので師長さんの的にはインシデントまでには至らないんじゃないですかっていうようなことを言われた」など、〈臨地実習施設側と看護教員の情報漏洩の基準の相違〉があることや、「病院で看護師になってからのインシデントと学生でのインシデントというところはすごく違いがある」など、〈看護師と看護学生のインシデントの判断の相違〉があり、【臨地実習施設側とのインシデント判断の齟齬】が抽出された。

V. 考察

1. 臨地実習において看護教員が実践するインシデント防止対策

教員は、臨地実習に先立ち【インシデントの意識化のための実習オリエンテーションや危険予知トレーニングの実施】を実施することで看護学生が危険予知能力を養うことが実習中のインシデントを防止することにつながると考えていた。危険予知トレーニングとは、KYTとも呼ばれており、工業分野で始まった危険に関する情報をお互いに寄せ集め、話し合って共有化し合い、みんなで集中して話し合い、それを解決していく中で危険に対する感受性や問題解決能力を高め、危険のポイントと行動目標を定め、それを潜在意識に強く訴える手法である。職場や作業の状況を描いたイラストシートを使って、1ラウンドで「どんな危険がひそんでいるか」、2ラウンドで「これが危険のポイントだ」、3ラウンドで「あなたならどうする」、4ラウンドで「私達はこうする」のテーマで話し合いを行うものでKYT基本4ラウンド法と呼ばれている²⁾。近年、臨床現場においても取り入れられ、医療安全教育の方策の一つとされている。看護基礎教育課程でも取り入れられており、経験値の乏しい学生において、リスクを察知する能力についての効果が検証されている¹²⁾。また、〈実習前オリエンテーションで想定されるインシデントを周知〉し、臨地実習中に起こりやすいインシデントの内容を看護学生に前もって指導することで学生に注意喚起を行い、防止するための対策も合わせて指導を行っていた。藤邊らは、インシデント予防教育として実習準備段階で行えるデモンストレーションを含んだオリエンテーションでまたはガイダンスを行うことが重要であると述べている⁴⁾。臨地実習で、想定される場面をイメージ化させておくことで、看護学生のリスク感性を高めることが重要である。さらに、小児看護学や精神看護学実習では、【対象者（患者）のリスクアセスメントに関する学習】が重要であり、他の実習とは異なる注意点の指導を実践していた。患者は発達段階や疾患の特徴により、看護学生が想定していない行動をとる場合も多い。看護教員は、学生の受け持ち患者

が起すかもしれない危険について、患者の発達段階や疾患をふまえて指導することによりインシデント防止対策をしていた。

看護教員は、臨地実習中、看護師や教員に対する【報告・連絡・相談の徹底を指導】を行い、学生の行動把握を行っていた。日下らは、看護学生が看護教員や臨地実習指導者に対して報告・連絡・相談を行い、常に自分の行動を知らせることを習慣化できるように意識づけることが、事故防止につながる、と述べている⁵⁾。看護教員は、学生の看護援助によるインシデントが起こりうる場合、看護学生からの報告・連絡・相談をタイムリーに受けて事故防止ができるような対応をしていた。

さらに、【報告・連絡・相談の周知】は、【看護教員と臨地実習指導者の協力による安全管理を意識した指導体制の整備】がとられていなければできないことである。このカテゴリは、教員ができるだけ臨地に常駐し、指導者と協働しながら安全管理を意識した指導体制を構築することを重要視していることから抽出されたと考えられる。また、〈学生単独で看護援助を行わない指導体制の整備〉により、対象者（患者）に直接関わるインシデントを未然に防ぐよう対策を講じていることが窺えた。

2. 臨地実習において看護教員が看護学生にインシデントレポートを記載させる時の判断上の課題

臨地実習で看護教員が学生にインシデントレポートに記載させる時の判断上の課題では、【学科による大枠の基準はあるが曖昧】が抽出された。看護学実習ガイドラインで臨地実習における事故発生時の対応マニュアルの整備や、実習領域ごとに初学者に発生しやすい事故やその予防方法について実習指導者等と事前に確認することは提示されている¹¹⁾。しかし、看護学生が臨地実習中に、どのような看護援助の場面で、どの程度のインシデントの発生状況の場合に、インシデントレポートを記載しなければいけないかは示されていない。本調査においても、このような点が不明瞭であるため、【学科による大枠の基準はあるが曖昧】が抽出され、インシデントの記載の有無は各教員の裁量に任されている現状があったと考えられた。

看護教員は、過去のインシデント事例などを参考に、領域長に相談し、〈最終的には領域長が判断〉するという形をとっていた。これは、臨地実習は領域単位で実施している現状があり、看護教員は、領域長に相談し指示を受けて対応することで、学科による基準が曖昧であっても領域長を中心に領域内では一定の基準に沿うような判断で対応したいと考えていることが推察された。看護教員や領域によるインシデントに対する考え方の相違は指導の一貫性を損なう恐れがあり、【看護教員間のインシデント判断の齟齬】について、看護教員はインシデント判断上の課題と捉えていた。看護教員は、インシデントレポートの記載を指導する際には、学生が自身の

行動を振り返ることができるように、医療安全教育の一環と捉えて事例や行動の振り返りのための判断を行い、指導を行っていた。塩霧らは、学生の成長につながる指導は、学生を支持し、インシデントの振り返りを一緒にすることでインシデントを学びに変えることであると述べている¹⁴⁾。看護教員はインシデントを教育の機会ととらえ、学生の行動の特徴を振り返らせ、同様のインシデントを起こさないように指導し、他の学生にもインシデントレポートの事案を活用して教育していることが明らかとなった。一方、看護教員間の判断の齟齬の事例から、〈罰として記載させる看護教員への違和感〉、〈隠ぺいしようとした看護教員への反発〉が抽出された。インシデントレポートは有用な情報として今後の事故防止に活かされるものであり、組織全体の安全管理の改善をめざすものである。看護学生の段階から、インシデントレポートを記載することが、罰でもプライドを傷つけるものではないことを理解させ、インシデントレポートを記載することに悪いイメージをもたせないような教育的なかわりが重要である。

インシデントの対象には患者がかかわることが多く、その場合は【臨地実習施設側とのインシデント判断の齟齬】を課題と捉えていた。その事象の多くは、患者の個人情報漏洩に関するインシデントであり、看護教員は臨地実習施設の基準や判断に基づき、学生のインシデントレポートを作成し、原因分析や、今後の対策について臨地実習施設側に報告を行っていた。臨地実習施設の実習受け入れの許可がなければ臨地実習は成り立たず、臨地実習施設側の求める場合には必ずインシデントレポートを作成している現状が浮き彫りとなった。

一方で、看護学生は学びの段階であり、患者に対するインシデントは存在せず、看護教員や臨地実習指導者の指導の問題であるという考え方である〈看護学生にはインシデントは存在しないという見解〉を行う教員の存在も明らかとなった。看護学生を対象とした実習中の事故等に対応した総合補償制度である Will[®]の補償の対象として、他人への賠償責任も含まれている。補償の一例として、「患者さんを車椅子に移す時に、支えきれず転ばせてしまった」など患者を対象とした事故例が含まれている。これは看護学生として、法的な責任の如何に問わず、金銭的な補償を行う必要が生じる可能性があることを示唆しており⁶⁾、責任の所在に係わらず臨地実習指導中のインシデントを防止していくことは重要である。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究対象者は6名の看護教員であり、地域も中部地方と限定されている。また、指導している看護学領域・職位も異なっていることから、一般化はできない。今後は、本研究成果より質問紙調査を実施して、全国の看護

系大学に調査を行い、臨地実習における看護学生のインシデントの防止対策や判断について量的な研究につなげていきたい。

VII. 結論

1. 臨地実習において看護教員は看護学生によるインシデント防止対策として、【インシデントの意識化のための実習オリエンテーションや危険予知トレーニングの実施】、【報告・連絡・相談の徹底を指導】、【対象者(患者)のリスクアセスメントに関する学習指導】、【看護教員と臨地実習指導者の協力による安全管理を意識した指導体制の整備】を実施していた。
2. 臨地実習において看護教員が看護学生にインシデントレポートに記載させる判断上の課題は、【学科による大卒の基準はあるが曖昧】、【看護教員間のインシデント判断の齟齬】、【臨地実習施設側とのインシデント判断の齟齬】が示された。

利益相反

本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。

参考・引用文献

- 1) 安藤悦子 郡司理恵 岡田純也 川波公香 浦田秀子 寺崎明美 成人看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験に関する実態調査, 保健学研究, 19 (2), 65-74, 2007
- 2) 中央労働災害防止協会編 ゼロ災実践シリーズ 危険予知訓練, 第4版, 49-55, 2015
- 3) 藤井美穂子 下里裕美 入里梓 嶋田祥子 米山万里枝 日本の看護系大学の臨地実習におけるヒヤリ・ハットに関する文献検討, 東京医療保健大学紀要, (1), 35-41, 2015
- 4) 藤邊祐子, 坂本保子, 高橋雪子 臨地実習におけるインシデント予防教育に関する文献検討, 八戸学院大学紀要, 58, 155-162, 2019
- 5) 日下知子 松本明美 沖田聖枝 看護学実習におけるインシデント・アクシデント調査報告-事故防止に対する教育方法の検討-, 川崎医療短期大学紀要, (27), 7-12, 2007
- 6) 一般社団法人日本看護学校協議会共済会総合補償制度 Will (2022) 学生用 Will, <https://www.medic-office.co.jp/will/about/> (2022年10月30日閲覧)
- 7) 加藤美智子 岡崎恵子 鷗沢淳子 臨地実習における安全教育についての課題-2年間のインシデント・レポートの分析を通して, 帝京平成短期大学紀要, (15), 49-56, 2005

- 8) 風岡たま代 伊藤ふみ子 有田清子 成人看護学実習での看護学生のヒヤリハットー急性期実習と慢性期実習の比較, 横浜創英短期大学紀要, (7), 57-66, 2011
- 9) 城戸口親史 巴山玉連 古谷洋子 看護学生の臨地実習におけるインシデント・アクシデントの体験の現状, 山梨県立看護大学短期大学部紀要, 12(1), 43-49, 2006
- 10) 厚生労働省 (2009) 医療安全推進総合対策～医療事故を未然に防止するために～医療安全対策検討会議, <https://www.mhlw.go.jp/topics/2001/0110/tp1030-1y.html>, (2022年10月30日閲覧)
- 11) 文部科学省 (2020) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第二次報告 看護学実習ガイドライン, https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf (2022年10月30日閲覧)
- 12) 村上弘之 山本恵美子 安藤郁子 KYT による看護学生の医療安全教育の検証, 東都大学紀要, 3(1), 56-63, 2013
- 13) 中澤洋子 中村恵子 高儀郁美 成人看護学実習におけるインシデントの実態と教育上の課題, 北海道文教大学研究紀要, (39), 101-109, 2015
- 14) 塩霧都恵 土屋八千代 看護学生が臨地実習でインシデントを起こした後の教育的なかかわり: 看護学生・実習指導者それぞれの立場から検討する, 日本看護学会論文集: 看護教育, 46, 151-154, 2016